

俺は精神病者ではないぞ」

俺は二十分もうたゝねしたらうか。

便所へ行つて歸りに、小使室に腰を下ろした。

留置場の中に居た男が出て來るのを見ると、インバネスを着てゐる。

中にも一人詰襟の洋服を着た丸刈の男が居た。

俺を擲つた青年團の奴も、一人位参考人として、召換されてゐたかも知れない。

「僕は森と云ふんだが、君は知るまい、君等と同じグループだから、今に出たら遇ふ事もあるよ」

巻煙草を一本、其のインバネスの男が呉れた。

松澤病院の醫者が來て、俺を診察する事になつた。

署長は俺に鐵道病院へ這入らないかとすゝめた。

「君は此處を出て、東京には居られないよ、國へ歸るかね」

署長は引取りに來た主義者に、腹をかゝせた喜びを感じたらしかつた。

「そんなら君は、失戀の爲に發狂してはゐないと證明をかくから、直ぐ汽車に乗る事にしよう」